

「ヨハネによる福音書」を読む前に

以上のような進め方に従って「ヨハネによる福音書」を御一緒に読み進めていきますが、実際に本文に入る前に 2 つのことを理解しておきたいと思います。一つは、「いつごろ」「どの辺りで」「どんな人（たち）が」この福音書をまとめたのかということです。そしてあと一つは、「どんな時代の状況の中で」「どのような社会の文化に身を置きながら」そうしたのかということです。「ヨハネによる福音書」を読み解く場合、これらについて知っておくことがとても重要になります。ここでは要点だけをかいつまんで記しますが、読み始める前の準備としましょう。簡略ながら、関係する年表と地図をまとめて添えておきます。参考にしてください。

いつごろ、どの辺りで、どんな人（たち）がまとめたのか

1. いつごろ？

研究者の間ではほぼ一致しているのは、紀元 90 年代のどこかということです。つまり、「ヨハネによる福音書」は紀元 1 世紀の終わりにまとめられました。（添付の年表「ヨハネ福音書の時代：福音書編纂の前後」を参照）

2. どの辺りで？

この点については幾つかの可能性が指摘されていて、研究者の間で必ずしも一致していません。主なものを挙げると、以下のような説があります。（添付の地図「ヨハネ福音書の世界：地中海沿岸」「ヨハネ福音書の世界：パレスティナ」を参照）

- ・エフェソ：小アジア（現在のトルコ主要地域）に位置。従来、考えられてきた場所
- ・ガウラニティス、バタネア地域：シリアとパレスティナの境界地域。現在、有力な説
- ・カイサリア：サマリアの、地中海沿岸のユダヤ人都市
- ・パレスティナ→シリアの境界地域→エフェソ：ヨハネの共同体が、パレスティナから始まり、シリアの境界地域を経て、小アジアへと移動。その間、執筆や編纂を重ねて、エフェソで最終的に完成したとする説

3. どんな人（たち）が？

著者についても様々な推定がなされており、研究者の見解は一致していません。古くはイエス・キリストの 12 弟子の一人のヨハネ（ゼベダイの子ヨハネ）を福音書全編の著者とするものから、今日ではヨハネの共同体の複数の中心的人物が執筆と編纂を重ねて現在の形にまとめたとするものまで、多くの説が唱えられています。

*結局、どのようにして？

ユダヤ、サマリア、ガリラヤを含む紀元 1 世紀のパレスティナは、政治的にも宗教的にも極めて不安定で流動的でした。そうした状況の中で信仰の群れを守り、宣教し、福音書をまとめていったと

すれば、次のように推測するのがひとまず妥当なのではないでしょうか。

すなわち、イエス・キリストの福音の出来事がまず初め、12 弟子の一人のヨハネの口や書き物を通して伝えられます。その群れもしかし、激しさを増す迫害のなか、場所を変えることを余儀なくされていきます。とはいえ、自分たちの信仰をいま一度 確認するためにも、また宣教の内容とその言葉をより確かなものにするためにも、イエス・キリストの福音書をまとめることをやめるわけにはいきません。そのようにして、ヨハネの共同体はその場所を変えつつ、さらには執筆や編纂の人材も得つつ、福音書の完成へと作業を続けたのではないのでしょうか。そこには、自然なこととして、ヨハネによる言い伝え以外の伝承や資・史料も加えられたことでしょう。こうして 1 世紀の終わりに、エルサレムから小アジアに及ぶ一帯のどこかで完成したのが、今 私たちの目の前にある「ヨハネによる福音書」なのではないのでしょうか。

どんな時代の状況の中で、どのような社会の文化に身を置きながらまとめたのか

1. どんな時代の状況の中で？

添付の年表「ヨハネ福音書の時代：福音書編纂の前後」を御覧ください。紀元 70 年には、「エルサレム神殿炎上。エルサレム、陥落する」とあります。加えて、直後の 73 年には「岩山の要塞マサダ、陥落する」とも記されています。エルサレムの東南、死海の西岸にそびえる岩山の要塞で、ローマ軍との戦いの最後の^{とりで}砦になったところです（添付の地図「ヨハネ福音書の世界：パレスティナ」を参照）。要するに、「ヨハネによる福音書」は一つには、これらの後・これらの出来事を受けてまとめられたということです。

ということは、いったい、どんなことを意味しているのでしょうか。それは、占領国ローマの圧政が強まったのはもちろんながら、ただそれだけでなく、ユダヤ教側からの迫害もいっそうその激しさを増したということです。なぜなら、何よりも大切なエルサレムの神殿をローマとの戦いで失ったユダヤ教は、律法の教育とその^{じゅんしゆ}遵守の徹底によって祖国の一致を図るほかなくなったからです。神殿礼拝に代わるものとして、内側からの信仰の強化をいま一度 徹底させていったのでした。そして、その結果、さらにも強められたのがほかでもありません。自分たちと異なる者らへの迫害であり、異分子キリスト信者の排除だったのです。

このような時代状況のなか、「ヨハネによる福音書」はその目的の一つとして、揺らぎかねない信仰のより所を確固たるものとし、取り巻く逆境を乗り越えて前に進ませるためにまとめられたと行うことができるでしょう。

2. どのような社会の文化に身を置きながら？

終わりに、「ヨハネによる福音書」の時代はどのような社会の文化が広がっていたのかということです。福音書に登場する人々も、またそれをまとめた人（たち）も、旧約聖書の土地でその伝統に従って生きてきた者たちがほとんどでした。ですから、そこにはまず、ユダヤ教の社会に伝統的な文化があったのは言うまでもありません。「ヘブライズム」と呼ばれる精神文化です。けれども、ただ

それだけでもありませんでした。それとともに、「ヘレニズム」と呼ばれる精神文化もかなり広く知られていたことが分かっています。

「ヘレニズム」というのは、一言で言うなら、ギリシア的なものの考え方に基づく精神文化と言えるでしょう。そうした文化が、エジプトやインダス川西岸にまで至る広い地域にわたって影響を及ぼしていたということです。しかも、その起源はなんと、大帝国を誇ったあの古代マケドニアのアレクサンドロス大王（アレクサンドロス3世）の治世にありました。紀元前の4世紀です。ギリシアのすぐ北に位置していたマケドニア王国がその頃から、南に・東にと勢力を拡大。その大規模な進出によってギリシアの文化が東方に伝えられ、広く浸透していきました。パレスティナも当然ながら、この歴史の中にありました。つまり、ギリシア語もギリシア文化も、パレスティナにおいては必ずしも遠い異国のものではなかったということです。「ヨハネによる福音書」にまつわる人々も、程度の差こそあれ、そのような社会のそのような文化の中に暮らした人たちでした。

加えて、ヘレニズムの文化ということではあと一つ、忘れてならないことがあります。それは当時、「ディアスポラ」と呼ばれたユダヤ人たちが地中海沿岸の各地にいたということです。「ディアスポラ」とは「離散」を意味するギリシア語（διασπορά, -ās, ἡ）ですが、パレスティナ以外の異邦人社会などに移り住んだユダヤ人を総称してそのように言います。戦争や捕囚や、さらには経済的な理由等から生まれ育った地を離れざるをえなかった人々です。そのような人たちがすでに紀元前の6世紀頃から各地に散らばり住んでいたのです。彼らは当然のこと、ヘレニズムの文化の中で生活していました。ですから、ギリシア的な精神文化は彼らにとって決して縁遠いものでなく、むしろ日常的なものでした。そんな彼らは「ヘレニスト」と呼ばれます。問題は、そのようなディアスポラのユダヤ人たちが「キリストの教会」にも加わり始めていたということです。

それは、「ヨハネによる福音書」がまとめられるだいぶ以前から始まっていました。添付の年表「ヨハネ福音書の時代：イエスの生涯～初代教会の発展」と地図「ヨハネ福音書の世界：地中海沿岸」をあわせて御覧ください。年表を見ると、中央に「アンティオキア、ガラテヤ、フィリピ、コリント等に諸教会誕生」とあります。それはすでに、あの使徒パウロの活躍に先立つ30年代からのことで、パウロの伝道旅行によってその勢いをさらにも強めたことが分かります。地図を見ると、地中海沿岸に広がるそれら諸教会の様子が見て取れます。そこにディアスポラのユダヤ人たちが（さらには異邦人のキリスト者たちも）少なからず加わっており、教会の形成に中心的役割を担ったところもあったのです。研究者によっては、ヨハネの群れの中にも後年、ヘレニストがいた可能性があるといえます。

このようにして、「ヨハネによる福音書」は当時、「ヘブライズム」というユダヤ的な精神文化に深く根を下ろして執筆され、編纂されていきました。しかしながらその一方で、それと同時に、「ヘレニズム」というギリシア的な精神文化の一端にも触れながらまとめられていったと言えるでしょう。

以上が、「ヨハネによる福音書」誕生の裏に横たわる歴史的な背景です。福音書の語りかけを的確に聴き取るうえで、これらを知っておくことがどうして欠かせないのか。福音書のメッセージを

「今・この時を生きるこの私たちの生き方」に重ねて受け取るために、これらを覚えておくことがどうして重要なのか。それらについては、本文を読み進めるなか、本文の学びに沿って理解を深めていけたらと思います。

それでは早速、第1回の学びを始めることにしましょう。